

褐毛和種の肥育に与える放牧育成の効果

体重比1.5%の補助飼料を給与することにより、放牧育成でも舎飼と同様の発育が可能である。また、放牧育成牛は肥育時における発育がよく、肥育期間の短縮に有効で、しかも、枝肉重量やロース芯面積の増加が期待される。

農業研究センター 草地畜産研究所 (担当者: 加治屋 豊)

研究のねらい

本県には阿蘇地域を中心に豊富な草資源が賦存しており、これらは主として繁殖牛の放牧に供されているが、子牛の放牧育成に活用することができれば強健な子牛の生産や飼養管理の省力化、さらには草地利用の効率化が図れる。当所では、これまでに放牧育成でも十分市場性がある子牛が生産可能なことを明らかにしてきており、ここでは、放牧育成がその後の肥育成績に及ぼす効果について明らかにする。

研究の成果

当所産の褐毛和種を、図1に示す飼養管理プログラムにより肥育した。

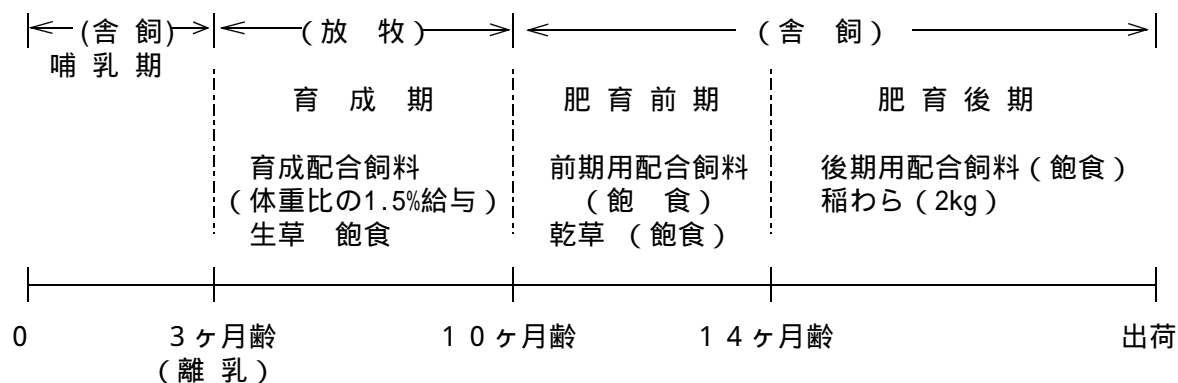
1. 輪換放牧育成牛に体重比1.5%の補助飼料を給与すると、舎飼育成牛と同様の発育が得られる(表1)。
2. 放牧育成牛は肥育期間のDGで0.1程度、出荷体重で約50kg舎飼育成牛を上回る(表2)。
3. 肉質等級は舎飼区が、枝肉重量とロース芯面積は放牧区が上回る(表3)。

普及上の留意点

1. 本成果は寒地型混播草地における成果であり、放牧にあたっては短草利用を心がける。
2. 放牧育成を行っているため肥育開始時は血中ビタミンA濃度が高い傾向があるので注意が必要である。

[具体的データ]

放牧区



舎飼区は育成期の粗飼料として乾草を飽食させた。

図1 飼養管理プログラム

表1 各試験区における育成期の体重・体高・DG

	体重 (kg)		体高 (cm)		育成期間 DG
	3ヶ月齢	10ヶ月齢	3ヶ月齢	10ヶ月齢	
放牧区	107.4	284.0	94.6	116.9	0.83
舎飼区	106.0	289.0	91.3	115.4	0.86

表2 各試験区における体重・出荷月齢・DG

	体重 (kg)		出荷月齢	肥育期間 DG
	肥育開始時	肥育終了時		
放牧区	284.0	760.0	26.0	0.97
舎飼区	289.0	723.9	28.0	0.84

表3 各試験区における肉質等級・枝肉重量・歩留・ロース芯面積・BMS

	肉質等級 (%)		枝肉重量 (kg)	歩留 (%)	ロース芯面積 (cm ²)	BMS
	3等級	2等級				
放牧区	25.0	75.0	491.3	64.7	58.1	2.5
舎飼区	54.5	45.5	471.7	65.1	51.1	3.1